



マーク・ガートラー《メリーゴーランド》(1916) Tate Modern, London
(この絵については p.17 の註 15 を参照されたい)

序 運動+(反)成長

武藤浩史・樽沼範久 MUTO Hiroshi/KURENUMA Norihisa

きずついたり、きずつけられたり。ココロのきず。バカいうな。
ココロはきずつかない。ココロをダレかミタことあるのか。
ぼくらにはそれぞれにひとりずつひとつのからだ・・・
(岩井俊二『リライ・シュシュのすべて』)¹⁾

精神から身体へ、それから……

先の第一論文集『身体医文化論 感覚と欲望』序文において、石塚久郎・鈴木晃仁は 20 世紀の学的関心の推移を、マックス・ウェーバー的倫理と精神からミシェル・フーコー的身体へという表現で端的にまとめてみせた²⁾。それでは、次に、21 世紀はどうなるのか、という疑問が自ずと興ってくるだろう。今世紀も 3 年目を迎えた 2003 年という時点で、その先には何があるのか、未来に続くいまの知的潮流の中で、『身体医文化論』第二論文集を出す意義はどこにあるのか、という問題をまず確認してみたい。その後で当論文集のテーマである「運動」と「(反)成長」に焦点を当て、それに考察を加えながら本書全体の構成と各論文の内容を手短かに紹介し、それが第一論文集とどこがどのように違い、どうそれを補完し、どのような発展、展開を目指しているのかを例証したいと思う。まずは、いま一度「精神」から「身体」へという流れに着目することから話をはじめてみようか。

1980 ~ 90 年代に特徴的なことのひとつとして、文系学問においては「自

1) 岩井俊二『リライ・シュシュのすべて』(ロックウェルアイズ、2001年) p.24。

2) 石塚久郎・鈴木晃仁編『身体医文化論 感覚と欲望』(慶應義塾大学出版会、2002年)。

己「身体」をはじめとするもろもろの中心的問題を社会、歴史に還元しようとする、フーコーの社会構成主義が優れた成果を生んだのに対して、理系の領域ではそれと正反対の方向への流れが加速されたことが挙げられる。たとえば、大ざっぱに言って、欧米近代文学研究は、フーコーの大きな影の下で、それまでの教養主義的な「こころ」の探求から離れ、むしろ近代社会の構築物である「こころ」の構造を解体・解析することによって、民族、ジェンダー、セクシュアリティなどに絡まるさまざまな歴史性を明らかにしてきた。一方、認知科学、生物学、脳科学においては、コンピュータ科学や遺伝子研究などの進展に影響を受けて、ヒューマンネイチャーの探求が深まり、「こころ」とは何か、「意識」とは何か、「自己」とは何かという問題に対して、より洗練された思考をめぐる事が可能になった。心身二元論の問題を解体し、「精神」の問題を「身体」のタームに還元して扱おうとする試みが盛んに行われた。そのような傾向は、『心の中の身体 *The Body in the Mind* (1987)』、『身体化された心 *The Embodied Mind* (1991)』、『デカルトの誤り *Descartes' Error*』(1994、邦題『生存する脳』)、『肉体の中の哲学 身体化された心と西洋思想への挑戦 *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought* (1998)』等、この年代を代表する認知科学、脳科学書のタイトルに集約されていると言える³⁾。

つまり、「精神」から「身体」に焦点を移すことによって諸問題を考え直すとする姿勢は文系理系に共通していると言えるのだが、社会構成主義が科学本質主義かという基本点においてその方法、発想が正反対なのである。その結果、90年代半ばに「サイエンス・ウォーズ」と称される、理系科学者による文系社会構成主義的科学論者へのすさまじい攻撃がスキャンダルを巻き起こす。問題の物理学者アラン・ソーカルによるポストモダン批判の中でやり玉に挙がったのは、フーコーよりむしろマルクスと合わせてフロイト精神分析という「擬似科学」を継承したラカン、クリステヴァらではあったが、本質主義対社会構成主義の闘争というより大きな文脈で見れば、そこに

間接的ながらフーコーが絡むのは明らかであろう⁴⁾。ジョン・ブロックマンという男が仕掛けた露骨なアメリカ中心、理系中心主義的統合文化論『第三の文化』が出たのも同じ頃だった⁵⁾。その彼には、後にラカン派の代表的な存在であるスラヴォイ・ジジエクが逆に嘔みついている⁶⁾。

しかし、同時に、脳科学の発達によって、構成主義对本質主義の対立は、大きな転換点を迎える。と言うのは、90年代の脳科学では遺伝子中心主義、機能局在主義の限界が明らかになり、コネクショニズムという考えに取って代わられたのである。人間脳の有様はたかだか数万の遺伝子によって一義的に決まるわけではなく、「成長」段階において「文化」の強い影響下で確立される無数のニューロン相互の複雑なネットワークに規定されることがわかった。だから、たとえばアントニオ・ダマシオの仕事のような自然科学の優れた成果からは、「自然」に対する「文化」「社会」の対等な地位を脱構築的に読み取ることが可能なのであり、「生まれつき」か「育ち方」という伝統的な問題、いわゆる Nature か Nurture かという問題の解答は、本書の坪川論文がその冒頭で述べるように、「生まれ」も「育ち」も同様に重要だという当たり前の、しかし当今の遺伝子中心主義隆盛の空気の中ではもしかしたら意外

3) マーク・ジョンソン『心の中の身体 想像力へのパラダイム変換』菅野盾樹他訳(紀伊國屋書店、2001年); フランシスコ・ヴァレラ他『身体化された心 仏教思想からのエナクティブ・アプローチ』田中靖夫訳(工作舎、2001年); アントニオ・R・ダマシオ『生存する脳 心と脳と身体のコダマ』田中三彦訳(講談社、2000年); George Lakoff and Mark Johnson, *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought* (New York: Perseus Book Group, 1998).

4) アラン・ソーカル、ジャン・プリクモン『「知」の欺瞞 ポストモダン思想における科学の濫用』田崎晴明他訳(岩波書店、2000年); 金森修『サイエンス・ウォーズ』(東京大学出版会、2000年)。

5) John Brockman, *The Third Culture: Beyond Scientific Revolution* (New York: Simon & Schuster, 1995).

6) スラヴォイ・ジジエク『全体主義 観念の(誤)使用について』中山徹・清水知子訳(青土社、2002年) pp.226-269。また、ジュディス・バトラー、エルネスト・ラクラウ、スラヴォイ・ジジエク『偶発性・ヘゲモニー・普遍性 新しい対抗政治への対話』竹村和子・村山敏勝訳(青土社、2002年) pp.308-309にも言及あり。

な、結論に達する。また、そのことは、自然科学の最新成果が、「自然」か「文化・社会」か、「理系」か「文系」か、という二者択一あるいは上下関係の秩序づけの無意味さを示しているということでもある。

これまで掛け声のみ大きく実行されることの少なかった領域横断的共同研究の妥当性が最新脳科学によっても確認された。そして、『考える細胞ニューロン』の著者櫻井芳雄のような広い視野を持つ科学者はそのことに気づいていて、自然科学者の自然科学中心主義に警告を発している⁷⁾。だが、実際問題としては、文理融合、いや協力にさえ困難がつかまとう。文学研究ではここ1～2年の間で認知科学的視点を取り入れようという動きが加速したが、まだまだ大きな成果をあげるにはいたっていない。また、50年代の「ふたつの文化」論争でF・R・リーヴィスによる文学中心の統合知論を批判したC・P・スノウが「第三の文化」という言葉を用いて構想した歴史・社会科学系中心の統合知のヴィジョンが、90年代には先述したブロックマンの『第三の文化』によって理系中心のものとして書き替えられるという歴史的経緯を見ても明らかのように、統合知構想には協力というよりもむしろ帝国主義的領土獲得競争のような主導権争いが影に日なたに目立つようだ。

もちろん、われわれの身体医文化論はそのような姿勢を反面教師とし、かつて埴谷雄高が「セイニク（精神＋肉体）と呼び、いまでは前述のように‘The Embodied Mind’ という表現に集約される問題系を、大田論文が提言する「(自然)科学」と「非(自然)科学」二元論の脱構築を理想的目標として、追求するものである。本論文集は、医療社会史の市野川容孝をはじめとする歴史系、英文学研究の仙葉豊をはじめとする文学系の論考を中心としながら、昨年に引き続いての生物学者坪川達也に加えて、老人医学研究で活躍する青柳幸利にも寄稿をお願いした。だが、理系学問を究めながらも総合的な視野と関心を兼ね備える研究者の協力を求める努力は、研究会としてより一層していかなければならない。また、文系学問の中でも、資料中心主義的な従来型研究に加えて、パフォーマンス系領域の第一線で活躍する和

栗由紀夫、松澤慶信、小沼純一の、そしてパフォーマンス芸術論から教育論へと思索を実践的に展開する熊倉敬聡の協力を得ることができた。その成果のほどは、読者諸賢の評価に委ねたいと思う。

運動+(反)成長 その1.(反)成長

さて、これまでの議論からもわかるように、身体医文化論にとっての「運動+(反)成長」とは、単なる生物としての人間の「動きと発達」という自然科学的・決定論的意味づけに限定されるものではもちろんない。論文によってアプローチは異なるものの、本書を全体として見れば、物理的な原義と呼び得るものを尊重しながらも、「運動」そして「成長」という語が否応なく担う意味上の文化的・社会的広がり それは言語の根源的比喩性によって可能となるのだが を精査した論考が多数を占めている。

「運動と成長」という主題系は西洋近代の文化と深いつながりを有している。たとえば、現代において「成長」という語は個人、人間、生物に使われる以上に、経済、社会、国家の状態を表わすために 最も頻繁な例としては「経済成長」といった形で 隠喩的に使用される言葉となっているが、このように西洋近代のキーワードと呼ぶべき「進歩」「進化」等の成長系諸概念は、生物学的領域と社会的領域にまたがる広く複層的な意味を帯びることが多い。「進化」(evolution)はダーウィニズム的「種の進化」のみならず、生物の原初的狀態からの成長という意を兼ね備えるばかりか、社会、文明についての成長を意味することが頻繁にあった。近代人の社会観、歴史観においては、社会の発展、文明の進歩が、胎児の成長や個人のライフサイクルのメタファーと切り離しがたく結びついていた。

以上のことより、「成長」とは、ヴォルテール、コンドルセらのフランス啓蒙

7) 櫻井芳雄『考える細胞ニューロン - 脳と心をつくる柔らかい回路』(講談社選書メチエ、2002年) pp.206-207。

思想やアダム・スミスに代表されるスコットランド啓蒙主義の進歩に対する信仰と不離の関係にあるという点で、近代思想の中核を成す概念と言うこともできる。18世紀にはじまるこの流れは、19世紀に至って、地質学から言語学までさまざまな領域で隆盛をきわめることとなり、その最も有名な例としてダーウィニズムを挙げることができるだろう。社会思想として影響の大きかったものとしては、このダーウィニズム以外にも、ヘーゲル哲学からマルクス主義に至る進歩史観を挙げることができる。だが、それらは、思想の外側で「成長」「進歩」とリンクするさまざまな近代的活動とも繋がりながら、19世紀末の「退化」恐怖をその先触れとし、マーラーの第六交響曲で打たれる3つの悲劇的鉄槌に予告されたかのような3つの大きな打撃——第一次世界大戦とファシズムとソ連邦崩壊——を受けて、支配的な力を失うことになった。それでも成長主義的思想はダーウィニズム的生物論や科学主義一般の中に根強く残っており、それが現在、遺伝子学の発展とともに、優生学の悪夢再来の不安、現代科学や経済中心主義に対する一般的不信を喚起してもいる⁸⁾。われわれは、成長と反成長を一对のキータームとして西洋近代文化史を回顧・要約し、また近代社会の現状を解析することができる。

さて、これを医学や身体の問題と結びつけるとどうなるか、というのが「身体医文化論」にとっては最も興味深い問題となる。本書では、まず第 部「知の構成の中へ」において、この「成長」問題を根幹から問い直した論考を集めた。市野川論文は、近代医学においてなされた人体実験という大きな問題を論じて、19世紀初頭の臨床革命以来西洋の進歩・拡大と歩を合わせるように成長を遂げてきたとされる近代医学の負の側面をえぐることにより、近代、医学、身体、成長の意味を問い直している。松本論文は、フロイト精神分析理論に焦点を合わせ、その背景的部分をラディカルに精査して、セクシュアリティ論や治療論に底流する発達主義を明らかにし、その功罪を検討する。一方、熊倉論文は、生々しい状況から切り離されたところで「達成」が測られる / 計られる、空虚な(しかし相変わらず再生産され続けている)知

的成長物語を、大学における自らの具体的な実践を通じて変化させようとする。工場と並んで近代社会装置の代表である学校制度が破綻しつつある現代において、そして「大学の危機」と大学「改革」が叫ばれている現在において、舞踊評論でも活躍する熊倉が新しい教育のあり方を探る野心的な論考である。同じ第 部に収められた北澤論文と坪川論文については、主として「運動」概念を扱ったものなので後述することとしたい。

第 部「文化の政治の中へ 成長 / 反成長」では、中山論文、大田論文、木下論文が、ダーウィニズムとナチズムをつなげる学問として近年注目を集める優生学思想・運動に焦点を合わせることにより、近代の成長信仰を身体の成長(あるいは反成長)と重ね合わせた医学・歴史・文化的見地から、この問題と真正面から取り組んでいる。中山論文は、ジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』に登場するユージン・サンドウのボディビル「身体文化」運動を優性学と絡めて、20世紀最大の作家ジェイムズの「身体医文化」政治学の構築を試みる。大田論文は、第一次世界大戦の影が色濃いヴァージニア・ウルフ『ジェイコブの部屋』の中の「反成長的要素」に注目し、英国モダニズム文化の女性身体表象の問題を取り上げて、優生学とフェミニズムの新解釈を野心的に呈示する。木下論文は、D・H・ロレンス『恋する女たち』に出てくる全裸の男のレスリングを精査し、これを退化とそこからの再生の問題、サンドウの優生学的『身体文化』にも出てくる日本の柔術表象と接続させる。

そのほかにも、仙葉論文が、世紀転換期英国の「退化恐怖」とも結びつく日本の神経衰弱ブームの文脈で、漱石文学を刺激的に解釈する。真嶋論文は、西洋に開かれていった明治期を扱って、西洋優生学の陰画とも呼び得る日本人の身体的劣等感とその克服の試みを紹介する。

8) この問題に経済学者の側から取り組んだ論文集として慶應義塾大学経済学部編『経済学の危機と再生』(弘文堂、2003年)がある。同傾向の文献に関しては巻末の文献案内をも参照のこと。

その中で、19世紀末から20世紀初頭の優生学的流れから離れ、19世紀初頭に書かれたアイルランドを舞台にした英国小説の中に現われる乳母の問題を扱った中村論文はユニークな試みと言えるが、より重要度の低いテーマでは決してない。近年、乳母は医学的文学史のテーマとして注目を集めており、ディケンズからジョージ・ムーアに至るさまざまな19世紀小説における乳母表象の変遷は大変刺激的なトピックである。また、中村論文は、乳母表象をイングランド・アイルランドの政治的問題に接続させているが、これもまた、のちにラドヤード・キプリングの少年帝国物語でも繰り返される問題系であり、植民地に対する欲望と恐怖というポストコロニアリズムの一大テーマとも通底する興味深いものである。

運動 + (反)成長 その2. 運動

「運動」に視点を移してみよう。もちろん、これも身体医文化論にとって、自然科学の扱う「運動」を超えた意味を有するものであり、「成長」と同じく西洋近代文化の特質と深く結びついている。19世紀に起こった歴史「運動」への関心、交通革命という物理的「運動」の拡大は言うまでもないが、「医」に近い領域を考えてみても、今日の知覚運動理論 知覚は身体の運動に依拠する に極めて近いアレクザンダー・ベインの心理生理学や⁹⁾、変化する環境に適応する運動を(知的活動を含む)生命活動と定義したハーバート・スペンサーの進化論が19世紀には生まれている。また、19世紀末から蓄音機、映画、無線 = ラジオなど運動感覚的なメディアが続々と発明され、静的な活字文化の支配を揺らがせたこと、そして、鉄道に続いて自動車や飛行機が人間をスピードに乗せる時代が20世紀に到来すると、それと連動するように「運動」の要素が正面から思想や芸術に導入されたことも重要だろう。

たとえば、エドムント・フッサールは講義「現象学および認識論の主要部」(1905)において、「一羽の鳥がちょうどいま陽射しをいっぱいを受けた庭を

横切って飛んでいこうとする」と語りかける¹⁰⁾。静物画のように静止した対象ではなく、映画のように運動する対象の認識が問題なのである。さらに『創造的進化』(1907)のアンリ・ベルクソンは、運動する対象を認識するという問題さえ偽りの問題であると指摘する。対象がA点からB点へと移動すると表象している限り、現実の運動は間から間へとすりぬけると言うのである¹¹⁾。ベルクソンの運動論はジガ・ベルトフの映画・映画論とともに、20世紀的映画体験のひとつの前線に見立てることができるだろう¹²⁾。

美術においては、ダイナミックな運動感覚を表象しようとするイタリア未来派の存在は言うまでもなく、未来派に批判的なマルセル・デュシャンさえも、道路を砕きながら彗星のように走る勝利の機械 = 自動車と1912年のメモに記している¹³⁾。「速度の美」「散弾のうえを走っているように、うなりをあげる自動車は、『サモトラケのニケ』よりも美しい」という有名な「未来派創立宣言」(1909)は、『速度と政治』のポール・ヴィリリオの言葉を借りれば、「当時の速度術的進化論の頂点に立つヴィジョン」を強力に閃かせていたのである¹⁴⁾。

9) エドワード・S・リード『魂から心へ 心理学の誕生』村田純一他訳(青土社、2000年)、p.121。今日の知覚運動理論としては、リードと関係の深いジェイムズ・ギブソンの生態学的アプローチはもちろんのこと、1990年代には、猿の運動前野で発見されたミラー・ニューロンが、人間の模倣力、学習力、共感力に関する洞察を深化させ、人間の知性・完成と運動性との繋がりを示唆したことも挙げられる。

10) エドムント・フッサール『内的時間意識の現象学』立松弘孝訳(みすず書房、1967年)、p.150。

11) アンリ・ベルクソン『創造的進化』真方敬道訳(岩波文庫、1979年)、pp.354-358。

12) Gilles Deleuze, *Cinéma 1: L'image-mouvement* (Paris: Les Editions de Minuit, 1983), p.91。

13) ミシェル・サヌイ工編『マルセル・デュシャン全著作』北山研二訳(未知谷、1995年)、pp.56-58。

14) エンリコ・クリスポルティ、井関正昭監修『未来派1909-1944』(セゾン美術館他展覧会カタログ、1992年)、pp.60-65; ポール・ヴィリリオ『速度と政治 地政学から時政学へ』市田良彦訳(平凡社ライブラリー、2001年)、p.95。

さて、ひるがえって 21 世紀に生きはじめたわれわれは、およそ 100 年前に誕生した「運動」文化の末裔として、「速度術的進化論」をさらに加速させて生きているのだろうか。アルフレッド・ジャリが『超男性、現代小説』(1902)で描いた「永久運動のレース」「永久運動食」を食べた 5・6 人乗り自転車チームが急行列車と速度を競うレースを、どこまでも走り続けているのだろうか。未だに速度は、われわれを魅惑する美や快楽を発散し続けているようにも見える。しかし、忘れてはならない ジャリが皮肉をこめて描くように、「永久運動のレース」にひとたび参加した人間は自転車に縛りつけられ、そこから降りようにも降りることはできない。「永久運動のレース」は、消耗の果てに死骸となった肉体さえも引きずっていく。このレースに賭ける生には、「死の冷氣」がぴったりと貼りついているのである¹⁵⁾。かたやデュシャンは、未来派的な素振りを見せると同時に、芸術に「遅延」を導入するという有名なメモを残している。これは「死の冷氣」の漂う「速度術的進化論」に対する批判、降りようにも降りられない高速(=拘束)運動を脱臼させる試みとして読むことができるだろう¹⁶⁾。いわば、「速度術的進化論」の渦中における「スローライフ」¹⁷⁾の先駆者としてのデュシャンがそこにいる。

われわれが本書第一部「生の運動・反復の中へ」において焦点をあてる「運動する身体」も、「速度術的進化論」からの自由を胚胎するような、より微細で多様な運動や記憶のはたらく場として構想されている。

小沼論文は、アストル・ピアソラやキース・ジャレットなどを例にしながら、楽器とそれを演奏する身体との関係、そして見られる身体やパフォーマンスの場との複層的な関係を、楽器身体論と呼び得る独創的視点から考察している。楽器を弾くという行為のなかに蠕動するマイクロな運動の群れが組織化される=慣れるということ自体への驚きへと、われわれを誘ってくれるだろう。松澤・和栗両氏に編者ふたりが加わった座談は、日本が生んだ戦後最大の舞踏家・土方巽の舞踏譜に着目し、その誕生の経緯を明らかにするとともに、そこに見られる言葉とイメージと身体運動との独自の相互関係、そ

して西洋近代のダンス・ノーテーションにはあり得ない身体運動の「材質感」、敗戦のトラウマを抱えた戦後日本の身体との繋がりについても語っていく。

さらには、芸術領域の外側にある、より現実生活に密着した身体運動も見落とすのは賢明ではないだろう。たとえば、ギブソンのアフォーダンス理論に連なる身体行為論が明らかにするところによれば、日常的には単純に見える「ひとつの」行為であっても、その行為のなかには、無秩序なマイクロ行為群が組織化されるための、無数の試行錯誤が折り畳まれている¹⁸⁾。また、アフォーダンス理論では扱われない、日常的な行為に織り込まれている文化的記憶の問題も見逃せない。本書では横山論文が、19 世紀英国のウォーキングブームという文化的記憶を下敷きに、歩行の問題をユニークな視点から論じている。また、同じ歩行を扱いながら、それとは対照的に、まさに現時点における医文化の現実的な問題に取り組んだのが、東京都老人総合研究

15) アルフレッド・ジャリ『超男性、現代小説』洪澤龍彦訳(白水社、1975年)、pp.187-271。「速度」と「永遠運動」の魅惑と恐怖を世界戦争に繋げた印象的な例としてマーク・ガートラーの絵画《メリーゴーランド》(1916)が挙げられる。Richard Cork, *A Bitter Truth: Avant-Garde Art and the Great War* (New Haven: Yale University Press, 1994), pp. 135-137.

16) 『マルセル・デュシャン全著作』、p.56。なお、デュシャンの《階段を降りる裸体》(1912)は未来派にも似たダイナミックな運動表象を取り入れると同時に、生理学者エティエンヌ=ジュール・マレーの連続瞬間写真「運動の静的表象」(デュシャン)をベースとすることによって、むしろ「階段を降りない裸体」を描いているとも言える(樽沼範久「マルセル・デュシャン《階段を降りる裸体〔No.2〕》における「運動の問題」」、『日仏美術学会会報』第13号、1993年: 23-38)。また、彼の映画『アネミック・シネマ(貧血映画)』(1925)や回転円板《ロトレーフ》(1935)は、ズレながら回転するだけで前進しない運動をつくり出している。

17) 食・住・働・性・遊における「遅さ(スローネス)」を肯定しなおす近年の試みとして、辻信一『スロー・イズ・ビューティフル 遅さとしての文化』(平凡社、2001年)が挙げられる。

18) 佐々木正人・三嶋博之編『アフォーダンスと行為』(金子書房、2001年)、第1章「運動の回復 リハビリテーションと行為の同時性」(宮本英美)、第2章「行為の推移に存在する淀み マイクロスリップ」(鈴木健太郎)、とりわけ第1章は、事故や病気によって運動障害を負った患者が「靴下はき」の運動を再発達させていくプロセス、そこに内在する多様な運動群が分析されており、身体医文化論にとっても刺激的なテーマになっている。

所で研究室長として活躍する青柳幸利の論文である。この論考は、高齢者にとっての歩行機能の重要性を豊富なデータを元に例証し、多くの読者の興味を引くばかりか、年齢に限定されず読者それぞれに実益をもたらすことである。

紹介が後になったが、本書第一部「知の構成の中へ」の北澤論文、坪川論文も、運動の問題系に密接な関わりを持っている。北澤論文は、わが国が近代化の過程において西洋から「運動」という概念を輸入しそれを実践してゆくに従い、従来の身体観が西洋型生理学的身体観に取って代わられるさまを詳述し、日本における運動概念誕生の経緯を鮮やかに描き出す。一方、坪川論文は、魚類から人間に至る運動神経回路の有様を明晰に解説して、生物にとって動くということの根源的な意味を提示し、合わせて生物の脳の進化の流れを例証して「成長」テーマにも繋げてゆく。このふたつを第一部で並べたのは、ともに生理学的な「知の構成」に関わるものであることに加え、社会構成主義的論考と科学本質主義的考察の見事な例を並置することにより、身体医文化論の姿勢を示したかったということもある。

以上のように、身体医文化論の第二論文集『運動+(反)成長』は、さまざまに近代の意味を問い直すものが中心となった。また、パフォーマンス系の論考を新たに加え、さらには理系研究者の論考を増やすことができたことは、今後の身体医文化論の「成長」にとっても悦ばしい事態だろう。

なお、冒頭に岩井俊二の『リライ・シュシュのすべて』(2001年小説版)からいささかセンチメンタルに響くかも知れない引用をしたのには、ある思いが込められている。引用そのものは「こころ」から「からだ」への流れが時代の空気になりつつある瞬間を切り取ったような一片の言葉に過ぎないが、この中学校「運動」部を舞台のひとつとした少年「(反)成長」物語である岩井の小説/映画は、「ポスト近代=成長神話終焉後」の人間の姿を一見「こころ」に傾斜した手法と主題で描いたように思わせながらも、映画のはじまりと

終わりで見せる緑の田に佇む少年の忘れがたい傾斜した身体姿勢によって「からだ」そして埴谷的に「セイニク」のテーマの深さを静かに示す興味深い例となっている。でき得れば身体医文化論は、芸術作品に時折現われる示唆的な身体表現にも敬意と注意を払うことをそのひとつの手立てとして、「サイエンス・ウォーズ」に象徴される文理科学の離反、社会構築主義と科学本質主義のあるときは行き過ぎた対立を超えた場所で「からだ」そして「セイニク」への考察を多角的に追究することにより、アカデミックな厳密さを堅持しながらも、人間の本質と歴史についてのある種の深さを備えた認識に達したいという望みを抱いている。